

‘紅まどんな’の植調剤利用と散布効果

ターム水溶剤の果実肥大促進と、フィガロン乳剤の熟期促進に対する散布効果は、その傾向はみられるものの何れも有意な差ではなかった。引き続き、散布時期などの検討を要する。

登録内容

紅まどんなに対する植調剤の登録内容

農薬名	使用目的	希釈倍数	使用時期	回数	総使用回数
ターム水溶剤 (NAA)	摘果	1,000~1,500倍	生理落果発生期 (満開10~50日後)	1回	3回以内 (果実肥大期は2回以内)
	夏秋梢伸長抑制	1,000~2,000倍	新梢萌芽時	2~3回	
	果実肥大促進	4,000~8,000倍	果実肥大期	2回	
フィガロン乳剤 (エチコゼート)	夏秋梢伸長抑制	1,000~2,000倍	新梢萌芽期	1~2回	4回以内 (1,000倍希釈散布は2回以内)
	熟期促進	2,000~3,000倍	1回目: 満開50~90日後 2回目: 満開70~110日後	2回	

果実肥大

試験区	横径 (mm)		母枝長 (cm)	葉数 (枚)	果実重 (g)
	8/22	12/10			
フィガロン	60.4	87.6	6.5	6.2	306
ターム	61.5	87.3	6.5	5.3	309
無処理	60.1	84.7	6.5	5.7	281
有意性	ns	ns	ns	ns	ns

注) Tukeyの検定により、ns有意差なし (n=3)

散布区は有意差はみられないが果実肥大が優れる傾向にある

試験区

供試樹: 7年生紅まどんな (2014)

作型: 簡易ハウス

透湿性シート被覆: 8/26

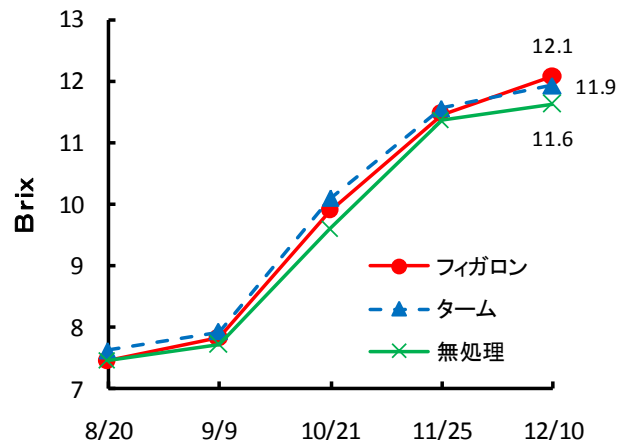
屋根面フィルム降: 9/17

(10/5~14ビニール巻上、台風降雨100mm)



試験区	倍数	散布日
フィガロン	2,000	8/24、9/10
ターム	4,000	9/10、9/26
無処理		

品質



フィガロン区で糖度がやや高い

散布時期、濃度、回数
の再検討が必要